女性研究者ロールモデル 04

大学院医学薬学研究部
准教授 **友田　明美**さん
Tomoda Akemi

●プロフィール

1987年　熊本大学医学部卒業
1992年　熊本大学医学部附属病院発達小児科助手
2003年　マサチューセッツ州マクリーン病院発達生物学的精神科学研究プログラムに留学。
　　ハーバード大学医学部精神科学教室客員助教授となる。
2006年　熊本大学大学院医学薬学研究部助教授

虐待される子どもを救い、心をいやす支援を。

子どもの心と体はつながっている

友田さんは小児科医として、発達小児科の睡眠・メンタル・発達障害グループで治療と研究に携わりながら、小児発達社会学分野の教師も務めています。

子どもの心は大人以上に繊細で、心にストレスを受けるとそれが脳に影響を与え自律神経機能が低下しさまざまな症状を生むことが最近わかってきました。ですから「子どもの心と身体を切り離して診てはいけない」という思いが、小児科医にはあるそうです。お母さんがうつ病であったり、育児ノイローゼになった場合、赤ちゃんは笑わなくなり、あきらかに「うつ」になるそうです。また、「愛情遮断症候群」は、親から愛情が注がれなくなると成長ホルモンの分泌が止まってしまい精神および身体の発達に障害が起きる病気です。友田さんは、米ハーバード大学医学部精神科のタイチャー先生の下で2003年から3年近くにわたり、研究をされてきました。タイチャー先生が「子どもの時に激しい虐待を受けると、脳の一部がうまく発達できなくなってしまう。そういった脳の傷を負ってしまった子どもたちは大人になってからも精神的なトラブルで悲惨な人生を背負うことになる」と話してくれたことが、友田さんにとって大きな転機となりました。

心とは脳である

友田さんが小児科医としてはじめて児童虐待の症例に遭遇したのは、1987年、某市立病院ER(救命救急センター)でのこと。瞬時に児童虐待のケースだと悟り、警察に通報したそうです。残念ながらその3歳の男児の命は救えませんでしたが、もし無事に救命されたとしても、発達過程の“こころ”に負った傷は簡単にはいやされません。子どもの時に、身体的虐待・ネグレクト（養育の放棄や怠慢）・心理的虐待（暴言）・性的虐待といった虐待を受けると、脳の一部に発達障害を起こします。「心」とは「脳」であり、その影響は大人になった後も、うつ病、PTSD、あるいは解離性同一障害や境界性人格障害などといった精神疾患に発展していきます。

カンヌで賞をとった日本映画『誰も知らない』は、典型的なネグレクトの映画です。留学中にボストンで中学生のお嬢さんとこの映画を見た友田さん、ネグレクトの意識がないまま、子どもを育てている母親がいる現実を多くの人に知ってほしいと思いました。

虐待は世代を超えて受け継がれていく

これまでの研究結果からみると「虐待は世代を超えて受け継がれていく」ことも分かりました。虐待を受けた親の3分の1はわが子に虐待を行い、3分の1は自分が様々な理由から追い詰められたりした時にやはり虐待を行う。つまり、虐待を経験して大人になった親たちの3分の2がわが子に対して虐待を行うという研究結果があるといいます。これは、医療分野だけでは解決できない問題です。虐待によってストレスに弱くうつ病になりやすいといった場合でも、社会的支援が非常に厚ければ発症の可能性が減ってくる場合もあります。虐待に気づいたらすぐに相談機関へ通告すること、小学校低学年からの児童虐待教育（どんな行為が虐待なのかを教える教育）など、虐待の連鎖を断ち切るためには、医学医療分野での対応だけでなく、様々な社会的支援が必要であることは間違いありません。虐待の現場から早急に子どもたちを救い出すことで「いやされない傷」を「いやされる傷」に変えていく支援が必要だと強調されました。

私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア「虐待のメカニズムと防止の研究開発」シンポジウムにて
（H20.2.10　獨協医科大学）